津高同窓会報

発行所
514-0042 津市新町３丁目1-1
津高等学校
同窓会事務局
TEL･FAX 059-229-7331
共立印刷株式会社

創立130周年
特集号

まれ形しき流れなり

ごあいさつ

同窓会長　飯田俊司（昭和36年卒）

今年は四月から十一月まで、ほぼ毎月のように津高創立百三十周年・津高同窓会設立五十周年記念事業が開催されたため、母校にとっても、同窓会にとっても大変忙しい年でありました。

各事業の実行委員の皆さんは実施に至るまでに何度も会議を重ねるなど、大変な努力をしていただき有難うございました。また多くの会員の皆さんには母校同窓会の事業ということで、ご参加いただき、いずれも大盛況裏に終わることが出来ましたことに厚くお礼申し上げます。

勉強やクラブ活動の合間を縫って「記念講演会」、「美術展」、「母校の教壇」、「経ヶ峰登山」に参加していただいた在校生の皆さんは、先輩と交流する中で同窓会員の母校への熱い思いを感じられ、また、現実社会に強く触れられたのではないでしょうか。

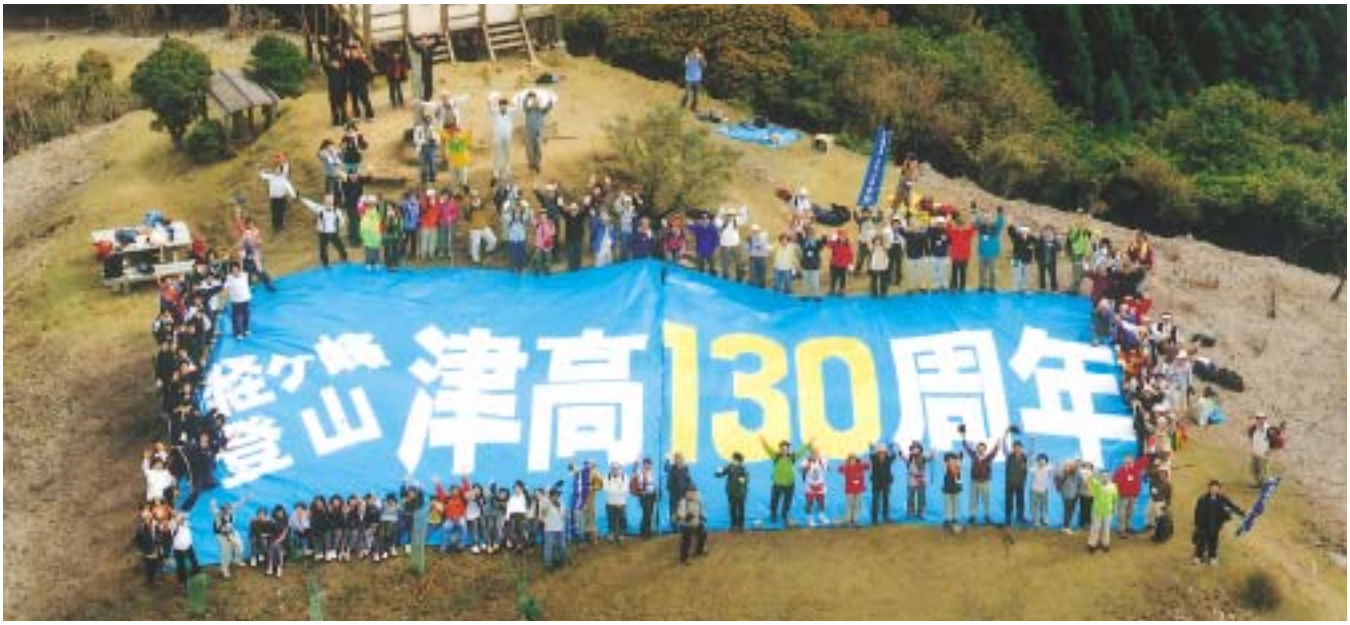
「母校の教壇」では親子、祖父母と孫ほど歳が離れた先輩と後輩が津高の教室で机を並べて、各界で活躍しておられる同窓会員や恩師の講義を受けている姿は微笑ましくもあり、津高同窓会事業ならではと心強く感じました。

海外旅行はトルコ・ギリシャ七泊八日の旅でしたが、帰りのアテネ空港のチェックインカウンターと免税店のレジでの体験です。長い行列が出来ているにもかかわらず、係が無愛想にやる気がなさそうにしているのを見て、私の前に並んでいた白人の中年女性がうんざりした様子で「THIS IS GREECE」と呟きました。ついさっきまで見てきた古代遺跡、西欧文明の発祥の地と言われるギリシャと財政破綻に喘ぐ現実のギリシャのギャップを垣間見たようでした。

そして、今年も本部（津）、東京、大阪、名古屋の各支部の総会も開催され、いずれも大盛況でありました。

しかしながら、会員数約三万五千人のうち同窓会事業に参加される方はまだ一部にすぎないのが現状です。ともすれば、人間関係が希薄になっている現代にあって同窓会の絆は強くありたいと願っています。どうかこれからも同窓会事業に積極的にご参加いただくことをお願いします。

最後に皆様のご健勝、ご多幸をお祈りしてご挨拶とします。



経ヶ峰登山　　平成22年10月17日「中日新聞社提供」
タイトル・書「津高校歌」より　　工藤　雅俊（昭和45年卒）

ご挨拶

学校長　榎本和能

会員の皆様には、ご健勝にてご活躍のこととお慶び申し上げます。平素は、本校教育活動に様々なご支援、ご協力を賜り、心より感謝申し上げます。

今年四月、本校の教育の充実・発展に精力的に取り組んでいただいた渡辺久孝校長先生の定年退職に伴いまして、木本高校から着任させていただきました。よろしくお願い申し上げます。

本校は、明治十三年に開設された「三重県津中学校」を前身としており、今年創立百三十周年を迎えました。また、陳川、三重桜、津高同窓会の統合以来五十周年であり、八月二十七日には多くのご来賓のご臨席を賜り、県総合文化センターで津高創立百三十周年・津高同窓会設立五十周年の記念式典を挙行いたしました。このような佳き日を迎えることができましたのは、日頃より格別のご理解とご支援を賜っております皆様方のおかげであると感じております。この記念式典において、同窓会よりトレーニング場の整備のため、多額のトレーニング機器を寄贈していただきました。改めてお礼申し上げます。

これまで同窓会が主催するいくつかの記念事業や八月の同窓会総会、各地の同窓会に出席させて頂き、多くの皆様にお会いさせていただきました。その際、津高の素晴らしさ、教育環境の良さや個性溢れる多くの仲間と過ごせたことを、年齢を問わず熱く話されることに感銘を受けました。また、本校の自由な校風とモットーである「自主・自律」の精神の育成を、本校の「不易」として大切にしていかなければならないことを改めて感じさせていただきました。

現在、本校の使命を「高い知性と教養を持ったリーダーの育成」と考え、個人的側面だけでなく社会的な関わりを通じて自己実現を図り、高い志を持って社会貢献のできる人材の育成を目指しております。

本校は、平成十九年に文部科学省からスーパーサイエンス・ハイスクールに指定されました。この指定により充実してきたキャリア教育やきめ細かい指導による一層の進路実現と、「文武両道」の精神のもと全教育活動を通じ人間力の育成を図っていく所存でございます。

会員の皆様におかれましては、今後とも母校に対するご支援をお願い申し上げますとともに、ますますのご健勝とご活躍をお祈り申し上げましてご挨拶といたします。

津高創立百三十周年 津高同窓会設立五十周年記念行事

記念行事にご参加有難うございました

事業総括委員長　瀬古淳一（昭和38年卒）

津高創立百三十周年、津高同窓会設立五十周年を記念して、

一月　津高同窓会新名簿発刊
二月　津高の四季を刷り込んだクリアファイル、一筆箋作製
四月　ウォークラリー実施
五月　ゴルフ大会実施
八月　美術展開催
　　記念寄付金贈呈式
　　講演会（秋山　仁氏）実施
九月　海外旅行
　　地中海クルーズ実施
十月　母校の教壇開催
　　経ヶ峰登山実施
十一月　国内旅行
　　足立美術館の旅実施
十二月　同窓会報
　　記念事業特集号刊行

以上のように、十一事業をほぼ一年間にわたり実施しました。

各事業への参加者数は、トータルで延べ五千人を超え、県外からも多数の方々にご参加いただきありがとうございました。

各事業の委員長には、一年以上も前から何度もスタッフと会議を重ねて準備を進め、すばらしい成果を発揮していただきました。心からお礼申し上げます。

今回の事業のコンセプトは同窓生と現役生徒との交流でした。

美術展では、過去最大の二百二十一点の応募があり、その中に、生徒が作品を出品しただけでなく、OBと一緒になって展示作業を手伝う姿がありました。

▶記念寄付の目録を贈呈

母校の教壇では、多数の生徒達も年齢差八十歳を超えて一緒に机をならべ、授業を受けました。また、学校内を親切に案内してくれる生徒達も、待機してくれていました。先生方にも準備作業や、機械操作等、大変お助けをいただきました。

経ヶ峰登山では、幼稚園児から八十五歳の長老、及び新旧の校長や先生方、ラグビー・テニス・剣道部等の生徒たちが一緒に登山しました。下山して、ふもとの小林さん宅でつきたてのお餅や、井村屋さんから提供を受けたあんまん・肉まんやアイスクリームをほうばりながら、いろいろな話が出来て楽しい交流会となりました。校歌も里中に響きました。

もうひとつのコンセプトとして津高の校歌を歌うことでした。

ギリシャのアテネのレストランでは、さよならパーティーで校歌から、出陣歌、応援歌等、肩を組みあって歌いました。珍しい光景に奥にいた調理人まで会場に出てきて手拍子をいただき大変盛り上がりました。

母校の教壇でも、恩師の授業の中で校歌がとり上げられ、一緒に歌ったということです。全体講演の終了後、全員で校歌を歌い、その声は、体育館中に響き渡りました。

津高の校歌は、実にいい！実にすばらしい！本当にすばらしい！

歌い継ごう この校歌！

皆様のご協力に感謝し、全体報告とします。

ウォークラリー

平成22年4月11日開催

委員長 松島明彦（昭和49年卒）

去る四月十一日、晴天の空の下でウォークラリーを開催しました。そもそもの企画は、津市内にある津高・陳川・三重櫻にゆかりの場所を巡りながら、現在の津高をゴールとしてウォーキングをしようというものでした。しかし、ただ歩くだけでは……、ということで、コース上に設問板を設置し、その答えを考えながら歩くウォークラリーなる手法で開催しました。

ウォークラリーとは、参加者は事前にコースを知らされず、当日のスタート地点で「コマ図」と呼ばれる部分地図を受け取り、数名のグループが、時間差を作ってスタートするというものです。しかも「コマ図」には文字表記が無く、目標物のイラストや歩いている場所を道幅で表現してあるだけの簡単なもので、一歩間違うとコースをはずれ、設問板に出会うことなくゴールすることになります。仲間が「コマ図」を見ながら一致協力し、正しいルートを探し、設問に答えながら歩いていきます。

「コマ図」に従いちょっとした宝探しのような気分で、母校にゆかりのポイントを巡るとなれば、より楽しんでいただけるのではないかと考えました。

今回は体力的な問題への配慮から、JR阿漕駅出発組と近鉄津新町駅出発組に分かれ、ゴール時間が同じになるようスタート時間を調整致しました。

当初、参加者の皆さんは初めてのルールに戸惑い気味の様子でしたが、好天にも恵まれ、スタートの合図とともに出発して行かれました。

ウォークラリーは単に歩くだけではなく、グループごとに順位を付けられるようにしてあります。設問の解答による点数や、スタートからゴールまでの所要時間による点数をつけて楽しみます。

さて、その結果は……。皆さんそろって津高OBの猛者?の方々で、ゆかりの場所に関する問題では答えを間違うはずもなく、その他の地点で少し問題に工夫し、ゴール後点数をつけて、優勝者を決めました。その結果、三浦義秀（昭和37年卒）ご夫妻が最も高い点数でゴールし優勝されました。

ささやかな景品でしたが皆さん大変喜んでいただき、成績発表も和やかに進めることができました。迷われた一組のグループもゴールし、企画は事故なく終了いたしました。

ウォークラリーに参加して

赤塚（義村）喜久絵（平成10年卒）

高校を卒業してから、十二年が過ぎました。「百三十周年記念行事ウォークラリー」の案内を同窓会報で見つけ、これなら、子連れでも参加できるかもしれない。みんなで散歩気分で、懐かしい津高の周りを歩いたら、きっと楽しいだろうと思い、友人たちに声を掛け、生後七カ月の娘をベビーカーに乗せて、参加しました。

当日、雨が降ることもなく、暑くもなく、歩きやすい日になりました。受付を済ませて、まず驚いたことが、他の参加者の方の服装でした。皆さん、ウォーキングシューズを履き、帽子にリュックサック。思わず、「私たち、場違いなんじゃ……」と心配になりましたが、赤ちゃん連れということで大人気。他のグループの方と記念写真を撮ったりして、和気あいあいとスタートしました。

久しぶりに会った友人と歩くということで、みんなおしゃべりに夢中。おかげでチェックポイントを2～3個見落としてしまいました。しかも、クイズが難しく、ヒントのある場所のものしかわからなかったので、たぶん、全問中、半分くらいは間違えていたと思います。参加する前は、「4キロくらいだから、楽勝。」と思っていたのですが、休憩がてら蜂蜜まんじゅうを買ったり、オムツ交換をしたりで、すっかり遅くなってしまい、他の参加者の方の姿が、周りに全く見えなくなってしまいました。不安を感じながら、ゴール地点の津高に到着すると、最下位でした。でも、係の方が暖かく迎えてくださったので、ほっとしました。

津高に行く機会はなかなかありませんので、こういった気軽に参加できる行事がこれからもあればいいと思いました。ありがとうございました。

ゴルフ大会

平成22年5月9日開催

大会委員長　竹林武一（昭和37年卒）
委員長　小柴眞治（昭和48年卒）

平成二十二年五月九日(日)、グランシエロゴルフ倶楽部に於きまして、津高創立百三十周年・同窓会設立五十周年記念ゴルフ大会を開催いたしました。

総勢百三十二名のご参加をいただき、盛大に開催することができました。当日は天気もよく、皆さん大いに楽しんでいただけたと思います。

午前七時から受付を始め、皆さん早めにお越しいただきスムーズにスタートすることができました。今回は待ち時間短縮の為、ショットガン方式（四ホールから同時スタート）で行いましたが、皆さんのご協力のもと予定時間通り、進行することができました。ありがとうございました。

午後三時過ぎから、飯田会長のご挨拶、竹林大会委員長の乾杯の発声で、パーティー・表彰式が始まりました。優勝は年齢による二つのクラス分けで、37年卒勝谷寛之さん、42年卒中村哲久さん。準優勝は42年卒浅野和子さん。ニアピン賞は38年卒薮島悦子さん、39年卒岩崎光生さん、41年卒松村弘光さん、46年卒岩田　敏さんでした。

和気あいあいの中、無事終了することができました。皆様のご支援、ご協力、誠にありがとうございました。厚くお礼申し上げます。

来年は例年同様、学年別対抗ゴルフ大会を開催する予定です。引き続き、ふるってのご参加をお願い申し上げ、記念大会のご報告とさせていただきます。

（文責　小柴眞治）

シニアの部で優勝して

勝谷寛之（昭和37年卒）

津高創立百三十周年・同窓会設立五十周年記念ゴルフ大会、松の部（シニア）で優勝の栄に輝きました。この日の勝因は三つの幸運に恵まれたものでした。

幸運の一つ目は、ハンディキャップに恵まれたこと。スコアは散々なものでしたが、おおたたきをしたホールが隠しホールであったことです。隠しホールのオーバー数は十六打です。

二つ目は年齢上位ということです。松の部で37年卒の赤塚様と、グロス、ハンディキャップ、ネットと三部門とも全く同じでありましたが、私のほうが少し生まれが早かったことです。

三つ目は全体では四位入賞でしたが今回設定されました松の部での優勝の獲得です。

以上の幸運により、優勝と呼ばれた時は感極まりました。バンザイ!!

現在もゴルフは大好き、健康のために竹林様の言われるATM（明るく、楽しく、前向きに）ゴルフを続けています。

最後になりましたが大会関係者、参加されました百三十二名のご健勝を祈念いたしまして私の感想とさせていただきます。

美術展

平成22年8月3日～8日開催

美術展開催に携わって

委員長　飯田道嗣（昭和28年卒）
伊藤清和（昭和46年卒）

本年夏真っ盛りの八月三日～八日の会期で三重県総合文化センターにおいて「津高創立百三十周年記念同窓会美術展」が開催されました。出展者は前回より大幅増で二百二十一名の卒業生・在校生の作品と共に恩師・卒業生の遺作が展示され、喜ばしく懐かしい思いに浸りました。

昨年の一月二十五日に最初の実行委員会が持たれ、前回までの資料を見ながら進めることになるのですが、前回の実行委員長が他界されているため細かなニュアンスが分からずほぼ白紙からのスタートとなりました。委員各自が提案・実行・確認作業を十回以上の会議・委員会を持ちながら準備していきました。

1（平成21年1月）同窓会展企画案―会期・会場・予算案を提出
同窓会会長・美術展実行委員長の挨拶で始まり、展覧会開催までの準備行程と役割分担が提案され動き始める。

2（平成21年4月）右記企画案が認められ決定
同窓会企画事業における美術展の意義確認（役員配分・予算等）

3（平成21年6月）同窓会展広報のための案内ハガキ作成・関係各位へ発送
同窓会報で展覧会の告知・実行委員各自の人脈で出展を呼びかける

4（平成21年7月）応募要項の作成
出品費・申し込み締め切り・搬入・搬出・運搬などを決定

5（平成21年10月）前回出展者へ応募要項を発送・案内ハガキ同封
同窓会会員・実行委員の人脈で出展見込み者に要項を発送

6（平成22年3月）同窓会展のチラシ・ポスター作成（恩師の遺作写真掲載が決まる）

7（平成22年5月）県内随所へチラシを配置・関係各位へ発送、ポスター掲示を関係各位に依頼、新聞・テレビ・ラジオ等のマスコミへの広報

8（平成22年5月）申し込み状況の確認
出展希望者の申し込み確認・出展見込み者の申し込み漏れ確認

9（平成22年6月）出展作品・出展者決定
出品目録・キャプション作成

10（平成22年7月）
展示配置決定（工芸・書道・日本

画・彫刻・恩師遺作・写真・洋画）

作業分担決定（部門別展示委員・部門別受付・搬入導入・搬入補助等）

11（平成22年8月2日午後1時～5時）

搬入・展示

事前準備がしっかりしていたため誠に順調に進み、また出展者全員が積極的に作業を行ったために予定より大幅に早く展示ができ、次の日はゆっくりと確認作業が出来ました。

いよいよ午後一時に同窓会会長・同窓会実行委員長・美術展実行委員長・顧問等役員によりテープカットです。感無量で実行委員全ての胸が熱くなりました。

展示はデザイン・工芸から始まり、陶芸・伊勢型紙・染色・金工・ポスターなど多彩で見応えのある作品が卒業年代順に並んでいます。ゆっくりと鑑賞しながら談笑し懐かしい会話が飛び交い同窓会展ならではの光景です。次に書道の展示で客員の先生方の見事な作品、大らかで力強い文字、優しく語りかけ心癒される仮名文字など数十点以上が並んでいました。次は日本画、伝統的で確かな技術に裏付けされた傑作

が鑑賞者を迎え、日本の自然に包まれ正に自分が日本人であることを実感する空間です。

日本画の顔料は宝石のように美しく輝いて言葉を失う程でした。次にがっちりとした彫刻が並び、同じ列に懐かしい恩師の作品群が飾られ、ここでは鑑賞者全てが足を止め、ひと時の思い出に浸っていました。写真コーナーは題材が多彩で風景の音や人々の声が聞こえそうな臨場感があり、大変楽しい空間になっていました。最後に洋画の展示は小品から150号までの作品が八十点以上並び、津高校の伝統の凄さが見る者を圧倒する会場になっていました。連日多くの来場者を迎え盛況で会期中に約二千名の方々が訪れました。このような素晴らしい同窓会美術展を開催できる学校の卒業生であることを誇りに思います。

（文責 伊藤清和）

記念講演会

母校創立百三十周年、同窓会設立五十周年記念事業「記念講演会」を終えて

平成22年8月27日開催

津高等学校教頭 竹森 淳二（昭和50年卒）

津高同窓会、津高PTAの共催を得て、去る八月二十七日、三重県総合文化センター大ホールで記念式典及び記念講演会を開催することができました。これまで津高校の発展に多大なる尽力をいただいた歴代校長先生や元同窓会役員の方々、県内の教育関係者を来賓としてお招きし、在校生、職員、同窓会役員、PTA役員、お申し込みいただいた同窓会員、保護者、近隣の中学生等総勢約千三百人が出席しての式典となりました。

式典は、音楽部による校歌斉唱で幕を開け、生徒の中から募った百三十周年実行委員の司会進行で始まり、榎本学校長、飯田同窓会長、小菅PTA会長の挨拶に続き、生徒会長松本剛君が、津高の伝統をしっかりと受け止め、継承していくことを力強く語ってくれました。

続いて、東海大学教育開発研究所の秋山仁教授に「ゴールを決めるのは魂の構えだ」と題して講演をしていただき、巧みな話術でたちまち会場が秋山ワールドに包まれました。秋山先生は「数学の伝道師」とも称され、マスコミでも大活躍をされていますが、専門誌にグラフ理論、離散幾何学に関する百二十編を超える論文を発表され、啓発書、専門書など約百冊を執筆されています。本校がスーパーサイエンスハイスクールの指定を文部科学省から受けた時の審査員もされていました。講演会前半は、本校生や中学生に向け、ウィルコックスの詩「運命の風」の一節を取り上げられ、「同じ風を受けていながらある船は東に進み、またほかの船は西に進む。行くべき道を決めるのは疾風ではなく帆のかけ方なのだ」「生涯という海路を辿るとき、ゴールを決めるのは凪か嵐ではなくそれは魂の構えだ」として、「大きな志を持とう」「自分の打ち込めるもの、好きなものを探し、それに向かって努力しよう」「無から何かを作り上げる創造的な日々を送ろう」「人は人を幸せにして感動させるために生きている」「失敗や挫折、絶望などが多ければ多いほど、人として大きく成長できる」とさまざまなメッセージを送っていただきました。後半は、創造することの楽しさを実践していただき、腎臓結石を音波で爆破する楕円形の反射装置などが、すべて数式理論計算されて設計されていることなどを、簡単な模型と風船の爆破実験で説明されたり、正三角形の穴を開けるドリルを見せていただいたりしました。最後に、「人生に下手でも大好きなものを見つけてほしい」と五十代から始めたアコーディオンの弾

き語りを披露され、楽しい時間を過ごさせていただきました。

その後、百三十周年実行委員が製作した「津高百三十年を振り返る」のスライド上映を行い、応援団によるエールにより締めとなりました。また、本校トレーニングルームの充実のため、同窓会より器具を寄付していただくことになり、この式典において、その目録の贈呈をしていただきました。ここに改めてお礼申しあげます。

百三十周年記念スライド作成に当たって

平賀　美津雄（昭和53年卒）

記念式典で上映した百三十周年記念スライドの作成に当り、写真を集めるのに一番困ったことは、資料の「なさ」ではなく「多さ」でした。生徒実行委員に手分けして色々な本を調べて資料を集めてもらったのですが、どれもこれも捨てがたいものばかりで、もっともっとお伝えしたいことがたくさんあったのに、皆様に充分お伝えすることができませんでした。これほど過去の資料が大量に大切に残されているということは、「津中」「県立高女」「津高」がいかに皆様お一人お一人の方々の心の中で大きな存在になっているか、いかに思い出を残そうと努力されているかということだとよく分かりました。特に百周年記念誌「あゝ母校」と「津高同窓会会報」は必需品でした。編集された方々は言うに及ばず、あれほどまでの膨大な量の資料を寄せられた方々の想いがひしひしと伝わってくる大傑作です。

また、この間、何度も様々なところで、現役の津高生の素晴らしさを再認識しました。

今、私の頭には、竹森教頭が式典の最後の挨拶で言われた「在校生のうちの何人かは昨今の平均寿命の推移からして、創立二百周年にめぐり合わせるだろう」という言葉が残っています。ある資料に「戦後、高茶屋の海軍工廠跡が南郊中学校になった」という箇所があったので念のために確認したら「昔の場所は今の所とは違う」ということが分かってきました。このように日々昔のことは忘れ去られていっています。二百周年に向けて今、残さなければもう分からなくなってしまうことがたくさんあるように思えてなりません。私たちが後世のために何を残せるのかが課題だと思います。

（津高教諭）

海外旅行　平成22年9月16日～23日催行

エフハリストー　―ありがとう―

奥田　榮子（昭和34年卒）

今回の記念海外旅行は飯田会長を団長に総勢四十三名の団体になりました。

関空で結団式後、トルコのイスタンブールへ。十七日未明到着後、すぐ観光という強行スケジュールでしたが、地形的にも文化的にも東洋と西洋の接点である光景を目の当りにし疲れも吹き飛びました。トルコ人の現地ガイドは久居出身の林輝美さん（昭和46年卒）のご主人で巧みな日本語でユーモアたっぷりの案内でした。ベリーダンスを見ながらの夕食を林さんとご一緒したのですが、ゆっくりお話が伺えず残念でした。

十八日モーニングコール三時四十分、飛行機とバスを乗り継ぎ、待望の二泊三日のエーゲ海クルーズへ。真白な七層のサファイア号に乗船、スタッフに新婚の日本女性がいて心強く思いました。乗船早々避難訓練を体験しました。

クルーズはパトモス、クレタ、サントリーニの三島に上陸、日傘が手放せない地中海の強い日差しの中、聖ヨハネの黙示録で有名な教会や修道院、紀元前二千年の信じ難い高度な文明を享受していたクノッソス宮殿、白い建物を赤く染めて沈む夕日などに感動の日々でした。船内では、盛り沢山の催し物があり、私はギリシャダンスとギリシャ語レッスンを受け、夕食後はバンド演奏やナイトショーを満喫しました。

二十日朝下船、いよいよアテネへ。二十二日夕刻の帰国までベテランの日本人女性ガイドの案内で、海神ポセイドンの神殿が建つスニオン岬、世界遺産のデルフィやアクロポリスなどを観光。市内がストで渋滞のため、思いがけず地下鉄に乗りました。アテネの地下は何処も遺跡だらけで、構内には工事中に発掘された遺物や遺構がそのまま保存され、まるで博物館のようでした。

二十日の夕食には、ガイド仲間の方からの白いご飯とごま塩の振掛けの差し入れがあり感激しました。

二十一日アテネ最後の夜は、シーフードレストランを借り切った晩餐会でした。「津高」の徽章をあしらったメニューが各自のテーブルに置かれ、一同声をあげて喜びました。

学生時代に戻り肩を組み、校歌や応援歌を大声で歌い、大いに盛り上がりました。長年ガイドをしているがこんな素晴らしい光景は初めてで一生忘れられないとガイドさん達も感激されました。その後立ち寄った闇にライトアッ

プされたパルテノン神殿は、昼間と全く異なる神々しさで胸打たれました。

お陰様で全日程好天に恵まれ、最高齢八十一才の女性を筆頭に全員元気に大満足で無事帰国できました。

添乗員のお二人、現地のミキトラベルの皆様のお心遣いに感謝してペンを擱きます。

母校の教壇

平成22年10月3日開催

委員長 葉山俊郎（昭和50年卒）

飯田会長より当行事の企画・運営をご指示頂いた折には、二つばかりの講演にパネルディスカッションを付け加えれば一応の格好がつくのではないか、と勝手に思い描いておりました。ところが、いざ実行委員会を編成し、同窓生のメンバーとワイワイガヤガヤやっているうち、いつのまにやら大きな話に発展してしまうはめになりました。そのような大きな時間割が組めるのだろうか。仮に組めたとして、果たして上手く運営することが出来るのだろうか。そんな不安も募る中、具体的に準備に着手しだしたのは開催日から一年半ほど前のことでした。

各学年からのご推薦や情報を参考に、先ずは各界でご活躍の皆様に「当たって砕けろ」のご登壇依頼。予想成約率50％の心配をよそに、ほとんどの皆様から二つ返事でご快諾を頂きました。それどころか、多くの方々から「面白そうな行事ですね、準備は大変でしょうが是非とも頑張って下さい」と励ましのお言葉まで頂戴をし、勇気百倍の思い。お陰さまでその後の準備活動にも拍車をかけることが出来ました。

そもそも同窓会は同窓生の皆様の愛校心とボランティア精神によってのみ成り立つ活動ですが、当行事もご多分にもれず予算も限られており、講師の皆様にもほとんど手弁当でご参加を頂くほかありませんでした。ひとえに創立百三十周年という母校の節目に出合いお気持ちからだけでご登壇頂いた講師の皆々様には、心より厚く感謝申し上げます。

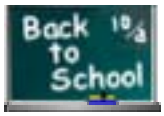
ちなみに、時間割を検討していく過程で、津高が多くの人材を幅広く世に輩出していることを目の当たりにした思いがします。このような企画をこのような規模で開催できるのは、県内では津高をして他には無いと言えるのではないでしょうか。

さて、当行事の準備は多岐にわたり、大勢の方々にお手伝い頂きました。実行委員会のメンバーはもちろんのこと、当日の運営スタッフとしてご協力頂いた多くの同窓生や現役生徒の皆さんたち。講師の世話役をお願いした先輩方。そして公務多忙な中、絶大なお力添えを頂きました竹森教頭先生をはじめとする現役教師の皆様。そうした大勢の方々お一人お一人のご協力無くしては、この行事の運営は不可能でした。感謝に耐えません。

そして、お足元の悪い中、ご参加を頂きました受講生の皆様方、本当に有難うございました。ほとんどの方が母校に立ち寄られたのは久しぶりのことかと思います。ましてや教室に身を置いて授業を聴くなど、おそらく在学以来のことではなかったでしょうか。

津高、そしてその教室は、今ある私たちにとって言わば「原点」のような空間かと思いますが、少しばかりのノスタルジーも良きスパイスとなって、寛いだ一日をお過ごし頂けたものと思います。皆様お一人お一人の明日の元気に少しでもつなげることが出来ましたなら、誠に幸いに存じます。

津高創立130周年記念事業



「 母校の教壇 」時間割

	第1講座	第2講座	第3講座	第4講座	第5講座
1限目 9：30 ～ 10：40 （70分）	齋藤　正和 （S23卒） 公益財団法人斯文会 名誉会員・齋藤拙堂玄孫 「津高の源流・藩校有造館の教育」	吉村　英夫 （S33卒） 映画評論家 「映画を楽しむ…山田洋次映画を中心に」	中村　安希 （H10卒） ノンフィクション作家 2009開高健NF大賞受賞 「バックパッキングジャーナリズム」		佐脇　功 先生 数　学 「天体望遠鏡の主鏡面研磨と二次曲線」
休　憩・移　動　（20分）					
2限目 11：00 ～ 12：10 （70分）	宮村　智 （S40卒） SBJ銀行社長 元ケニア大使 「アフリカで感じたこと・考えたこと」	中川　滋弘 （S47卒） 大阪芸術大学教授 「ガラパゴス化する日本映画」	佐々木　敏 （S51卒） 東京大学教授 「食事で生活習慣病を防ぐ—栄養疫学への招待—」	鈴木　茂 先生 （S20卒） 国　語 「文学的人生草子」	
お昼休み　（50分）					
3限目 13：00 ～ 14：10 （70分）	服部　重彦 （S35卒） 島津製作所会長 「こだわりの科学…見えないものを見えるように、測れないものを測れるように」	久野　誠 （S46卒） CBC中部日本放送 「より良いコミュニケーションのために」	茨木　政彦 （S51卒） 集英社第3編集部部長 「コミック誌編集長のここだけの話」	米本　宏 先生 （S4卒） 国　語 「ぼくの津中・津高」	小田　海平 先生 英　語 「英語構文“仕分け”の意義と効用」
休　憩・移　動　（30分）					
4限目 全体講演会 14：40 ～ 16：10 （90分）	体育館 奥田　務 （S33卒） J・フロントリテイリング会長 兼 CEO 「自主自律を考える」				

◆講義レポート

1－1

「津高の源流・藩校有造館の教育」

〈講師〉斎藤正和（昭和23年卒）

私がはじめて有造館を知ったのは津中一年生で漢文の伊藤先生（孔子さん）から有造館の第三代督学斉藤拙堂の漢詩「嵐山桜花」を教わった時であった。今日の講師斎藤正和さんは拙堂の五代目の子孫にあたり不思議な縁を感じた。

○　津高の源流・藩校有造館は、名君・藤堂高兌（たかさわ）が約二百年前に創立し、廃藩置県により、約七十年で津中に、更に六十年で津中から津高にバトンタッチされ今日に至る。「有造」とは『詩経』から採った語で「有為」という意味だ。その教育は士道を中心に文武の実技から洋学にまで及んだ。優秀な教授陣と優れた設備をもつ有造館の存在により、我が津藩は「天下の文藩」の名をほしいままにした。今日の津高には、有造館をかがみとしグローバルに通用する「有造」即ち有為な人材・世界に飛翔する人材の育成が求められよう。

○　受講生は約六十名で教室は満室であった。藩校の昔を示す多くの映像がスクリーンに映し出され非常に分かりやすかった。私は机に座った瞬間、六十年前にタイムスリップし津中生徒に戻って講義を受けた有意義な七十分であった。

（文責　中川禎二・S23卒）

1－2

「映画を惜しむ―山田洋次映画『男はつらいよ』を中心に―」

〈講師〉吉村英夫（昭和33年卒）

寅さんの世界に引かれてか、教室は受講生であふれていた。予定の七十分は、あっという間に過ぎ去っていった。

映画評論家として名をなした吉村英夫氏の語り口は、終始熱く、その世界にいつしか魅き込まれていった。

テレビと違って、映画は見る者の自由を保障するという。意図するところを押しつけるのではなく、パンフォーカスという技法で視聴者に投げかけ、あとは視聴者に委ねるという。映画の魅力は、存外、そんなところにあるのかもしれない。

ところで、寅さんシリーズの人気の秘密はどこにあるのだろうか。

放浪する寅さんの姿に、限りないロマンと自由を垣間見、憧れるのだろうか。その対極には定着の世界を生きるさくらの存在がある。寅さんとさくら、放浪と定着。その相互憧憬に重要な意味がある、と吉村氏は説く。

真の自由とは何か、真の幸せとは何か。人間は定着の中で真の自由、真の幸せを追い求めていく。そこに実は、この寅さんの長大シリーズのテーマが潜んでいるのである。

（文責　中川朝子・S33卒）

1－3

「バックパッキングジャーナリズム」

〈講師〉中村安希（平成10年卒）

中村先生の講義は、とにかく私たちの興味関心をそそる内容ばかりでした。先生は、世界各国の様々なトイレや資源について紹介し、また現代の問題についてお話をしたうえで、問題意識の啓発を促してくださいました。更に、先生は、世界に対して「無知」を認め、これからも現地に自らの足で赴きたいと話されました。

中村先生の講義の中で最も印象深かったお話を二つ、紹介します。一つ目は、「幸せのバロメーター＝笑顔」のお話。簡単に説明すると、人が幸せであるかどうか見極めるポイントは、笑顔があるかどうかで決まるということです。二つ目は、環境問題にも関係するのですが、先生は外国では容易に物をあげないようにしている、というお話。各国をめぐって先生が最もよく目にしたものはゴミだったそうです。人が住んでいる場所には必ずゴミが溢れている、私たちがあげた歯ブラシがいつかはゴミになって現地の人々が住む生活環境を汚していくのでは、と先生は考えていらっしゃいました。また、私たちは、現地の人々に無理矢理目新しいものを使わせていくのではなく彼らが長く愛用している物をこれからも大切にしていけるよう、私たちに出来るのは「見守る」ことではないか、とおっしゃっていました。

バックパッキングジャーナリズムという職を自ら作って、自分の足で、自分の目で、真実を見に行く中村先生に大変刺激を受けました。世話役として先生のお話を聞くことができ、大変幸運であったと思います。

（文責　倉田清香・H22卒）

1－4

「ローマ共和制・ローマ帝国付　ルネッサンス期のドン・キホーテ」

〈講師〉岩田　直衛先生（昭和14年卒）

※　講師の都合により休講

1－5 「天体望遠鏡の主鏡面研磨と二次曲線」

〈講師〉佐脇　功先生

「皆さん、こんにちは！」元気な挨拶で始まりました。四十年ぶりの再会でした。母校の教壇の事を聞いて、時間割を見たときに、アレ！こんなのがある！それが今回の講義でした。

在学当時に私は天文部で、佐脇先生は天文部の顧問でした。今でこそ口径の大きな天体望遠鏡を安く買うことができますが、当時は口径の大きな望遠鏡は、とても高価でしたので、なかなか買うことはできず、反射鏡を自作することが多かった時代でした。

私も十五センチ口径の反射望遠鏡が欲しかったのですが、部品の反射鏡にすら手が届かず、完成品は高校生の身分では夢のまた夢でした。

先生の講義は反射式天体望遠鏡の仕組みから始まり、主鏡面の研磨の方法を説明しました。二枚のガラス材の間にカーボンランダムという砂を入れ、前後運動、回転運動を組み合わせて、粗い砂から細かい砂へ進み、その後ピッチ盤というアスファルトの盤で最終研磨と修正を行うという一連の流れの説明でした。先生が昔に磨いた反射鏡とピッチ盤を持ってこられて、それを見てもらいながら説明するという内容でした。反射鏡は十センチぐらいのものは球面、それ以上は放物面に研磨するので、鏡面の話から次は二次曲線に話が進みました。ここからは懐かしい数学の授業です。円、楕円、放物線、双曲線などの方程式が出てきました。昔と違うのは、ここで先生が事前に用意してきた板と紐を使った道具を利用して、楕円や放物線や双曲線を描きました。方程式ではよくわからない部分が何となく眼で見えるので二次曲線が身近なものに思えました。

話はその後国際数学オリンピックのことになり、三重県の高校生も金メダルを獲得したそうです。

卒業後四十年を経て受けた講義ですが、とても懐かしく改めて数学を身近に感じることができました。佐脇先生、すばらしい講義をありがとうございました。（文責　岸畑安紀・S46卒）

2－1 「アフリカで感じたこと、考えたこと」

〈講師〉宮村　智（昭和40年卒）

今回の授業開催に当たり、先ず打ち合わせという無理やりの理由をつけ「講師との懇談会をセナあかん」と、十人以上が前日に集合。

大宴会をしながら、昔話や、われ、おれ、の時代の悪口や「今あいつはどうしてる」の情報交換に楽しいひと時を過ごさせてもらいました。

授業の前の講師の紹介が大きな役目だった私は原稿用紙をしっかりと握りしめ、教壇へ。

できる限り原稿を見ていない様に見せようとすればするほど早口になってしまい、冷や汗タラタラの状態でした。周りからも上がっているのが丸わかり状態だったらしく、後で皆に言われて恥ずかしい思いをしました。

講師は、二〇〇四年から三年間ケニア大使として赴任されました。全権大使としての辞令は天皇陛下の前で頂いたそうです。

ケニアは赤道直下にあり、首都ナイロビは高地にあり、快適な気候で過ごしやすい所だそうです。首都の人口は二百五十万人で、高層ビルが建つ中心街とスラムが混在し、貧富の差が大きい都市です。約五十の部族からなる国で、言葉はスワヒリ語ですが、英語と各部族の言葉を話すバイリンガルだそうです。インフラはまだまだ普及していなくて今後も援助が必要かと感じました。アフリカには世界遺産が沢山あり、人類発祥の地でもあるので自然環境を大切にしていかなければならないと思います。

また、貧困の撲滅も何よりの課題で日本がこれからも貢献できることが多くあると思います。赴任期間は充実した楽しい三年間だったようです。

講義終了間際に上映予定のヌウの大移動の動画が届き、やっと間に合ったと講師も関係者も胸をなで下ろしました。

そんなドタバタもありましたが、懐かしい諸先輩方や後輩の諸君にお目にかかれたり、白寿の米本先生から力をいただける授業を受けたりして、瞬く間に過ぎた一日でした。

母校の教壇を担当されたスタッフの皆さん、本当にありがとうございました。（文責　河合巳喜彦・S40卒）

2－2 「ガラパゴス化する日本映画」

〈講師〉中川　滋弘（昭和47年卒）

1　中川　滋弘先生のプロフィール

中川先生は、昭和44年津高入学。一年九組で私と同じクラスとなりました。天理高校を一年生で中退、津高校入学時には私たちよりも年齢的には一年年上で、おおらかな兄貴分としての風格を既に備えていたように記憶しております。東京大学文学部を卒業後、松竹に入社、「寅さん」シリーズ、「釣りバカ日誌」、「たそがれ清兵衛」など数々の制作に携わり、今は大阪芸術大学教授として映像科学を担当していらっしゃいます。

2　当日のお話

最近の日本映画業界は、映画会社が作成する映画は斜陽化し、テレビ局が制作する作品が観客動員力という点で優勢である。たとえば、「踊る大捜査線」などがその良い例である。のべ一千万人の観客動員は制作会社であるフジテレビも予想外の大成果であるが、テレビ局の資金力、企画力、キャスティング力、宣伝力が勝因といえる。反対に、興行成績が悪ければ、監督、役者とも再起用されることはなく、使い捨てにされる。極端な成果主義は、時間をかけて役者を育てるということがおろそかになり、芸術性、社会性、名人芸という重要な要素が欠落した映画が制作される傾向を生みつつある。少年期からマンガやテレビゲームになじんだ人（いわゆるゲーム脳、マンガ脳の発達した世代）たちに受けるような映画作りの方向に進むのではないかと思われる。今後、日本映画は、日本人には受けるが、外国では共感を得られない作品が多くなるのではないか。たとえば、「踊る大捜査線」シリーズも韓国（ソウルと釜山で公開）での興行成績は振るわず日・韓の観客の感性の違いが浮き彫りにされた感じだ。このような傾向は、日本だけではなく、米国にも見られ大手映画会社は、次々と買収され今ではディズニーだけが残っている。巨匠、スターが消えた映画の行方はどのようなものか?ということに考えを巡らしているとガラパゴス化は、日本だけではなく、世界的な潮流ではないかと思われる。

（文責　山中利之・S47卒）

2－3

「食事で生活習慣病を防ぐ ―栄養疫学への招待―」

〈講師〉佐々木　敏（昭和51年卒）

「栄養疫学」という聞きなれない言葉と東大教授の話ということで、堅苦しいイメージがあり、眠くなるような話であったらどうしようと心配していたが、始まってみれば、最初に高血圧という身近なテーマで人を惹きつけ、ときおりユーモアを交えながら最後まで人を飽きさせない授業で素晴らしい内容で、このような授業が聞ける学生が羨ましくなるようなものであった。内容を少し紹介すると、冒頭で「疫学」について「健康な人の血圧をたくさん測っておいて、何年も経過を見て脳卒中や心筋梗塞にかかった人とかからなかった人の健康なころの血圧を比べて決めた」という説明で見事全員に理解をさせた。そのうえで、多くが興味のある肥満度の数値BMIが低すぎても長生きできず逆に高齢者はBMIが高めのほうが長生きしていることやコレステロール値は揚げ物（植物油使用）摂取でむしろ下がる場合があることなど面白くかつ分かりやすく説明し、最後に、「これだけ」「すぐに、たった○○日」という話は、研究なしや単なる経験談のことが多く危ない。また、これらは、大半が中学・高校で習った知識で判断できるため、情報を整理し自分で考えて行動することが重要であるという、皆が陥りやすい罠を気づかせてくれるなど非常に有意義な内容であった。（文責　東　和広・S51卒）

2－5

「亮太が行く 津高の化学」

〈講師〉中川亮太 先生

※ 講師の都合により休講

2－4

「文学的人生草子」

〈講師〉鈴木　茂先生（昭和20年卒）

「司会をしてもらっとる先生は、私、最初高校生かと思てましたんや」（爆笑）「ところが三十を越してござるということでびっくりしましたんや」（爆笑）という親しみを込めた導入があり、①校歌。歌詞の原初原稿が見当たらず山口誓子先生に揮毫を依頼。その作品は校長室に飾られているが雨の中を苦労して学校へ運んだという秘話と、この優れた歌詞の一節ごとの解説②「逆爪（さかつめ）は親不孝ゆえと母言へり八十にして逆爪絶えず」八十三歳作の短歌に母を思う感慨を述べ③『まちかど』に連載中のミニ人生草子「鐘楼や一つ撞きたし里の秋」ほか自作自註の味わい深い俳句を六句④「電車の床に胡座（あぐら）する女高校生らに話かくれば話題は尽きず」から「胡座する女高生たち立ち上がりバイバイと言う下車するわれに」いたる不逞とも言うべき女高生との楽しい会話を詠んだ短歌五首。⑤敗戦忌。ご自身の恩師であられた釈迢空（折口信夫）の「たたかひにやぶれし日より日の本の倭（やまと）の恋は亡びたるらし」をひかれて敗戦を口惜しみ⑥「馬は黙っていくさに征った…」（茶木滋＝めだかの学校の作者）に戦争の無惨を⑦「秋声」という季語をいとおしみつつ中村草田男の「軍隊の近づく音や秋風裡」に平和を願い⑧結びに、殿村辰雄の詩『愛について』「人を／愛したいといふ思ひはいいものだ／いつもみどりのこずゑのやうに／高くやさしくどこかでゆれている　人に／愛せられたといふ思ひはいいものだ／いつも／そよ風のやうにこちら向いてまたたいてゐる」を朗読。和気藹々の中、爆笑に包まれつつ鈴木節の人間味に酔った七十分であった。なお講義終了後、一同で津高校歌を斉唱したことは言うまでもない。

（文責　塚澤　正・S24卒）

3－1

「こだわりの科学――見えないものを見えるように、測れないものを測れるように」

〈講師〉服部重彦（昭和35年卒）

「新しいものは何でも好き」の性質そのままに島津製作所に入社、技術開発に意欲的に取り組み、アメリカでの研究を経て世界トップレベルの分析機器や医療機器の開発に成功した。同社の社員だった田中耕一さんがノーベル賞を受賞した前後の上司としての裏話は、聴講者にとっては驚きの内容だった。

会社は人だと言い、社員に連なる家族全部を守るんだという会社経営の姿勢には感動したが、技術者として大きな成果を得た人の「科学技術の発展は人を幸せにするか」の問いかけは意外であった。

古代人間は五感ですべてを判断し、その範囲で日常生活を営んできた。しかし、五感で認識できない物質を知った文明社会は「見えないものを見えるように、測れないものを測れるように」の欲望が強くなり、産業革命以後技術革新のためのツール開発、病気の早期発見への期待から分析機器・医療機器の開発が急速に進んだ。

この科学技術の進歩は人類の活動を快適なものにした一方で、温暖化や各種汚染、生物資源の絶滅の危機など多くの問題を顕在化させた。

科学技術のもたらしたのは幸せだけでなかったことを認識し、今一度、地球に優しい科学技術の発展に向けて、自然循環型文明へ回帰してほしいものだと結ばれた。

これから科学をめざす若者へのメッセージでもあった。

（文責　坂部勝美・S35卒）

3－2

「より良いコミュニケーションのために」

〈講師〉久野　誠（昭和46年卒）

先生役の久野誠さんは、CBC中部日本放送のアナウンサーとして、現在は「CBCドラゴンズナイター」「サンデー　競馬中継　みんなの競馬」「ごごイチ（水曜日担当）」ほか、ご活躍中です。

当日は、六十七名の同窓生が物理教室に集まり、チャイムを合図に授業が始まりました。

アナウンサーの基礎（腹式呼吸・アクセント・滑舌・鼻濁音・母音の無声化）に加え、＋αの心得を具体的に楽しく話してくださいました。

・理解（相手に誤解のないように伝えるには、まず自分が理解していなければならない）
・思いの強さ（伝えたいという気持ちがなければ相手には伝わらない）
・話術（具体的に話すこと。相手の話をよく聞くこと）
・準備（シュミレーションと情報の収集、豊富なボキャブラリー）
・格好（これも大事な要素）

授業中は、笑いあり、一緒に発声する人、メモを取る人、質問をする人など、皆さん熱心に聴講され、アナウンサーとしての心得を通して、私たちの日常生活での人との関わりにおいてとても重要な部分を学ばせていただきました。

最後は「一生勉強」という言葉で締め括られ、懐かしい母校での心に残る七十分となりました。

（文責　中島　知子・S46卒）

3－3

「コミック誌編集長のここだけの話」

〈講師〉茨木政彦（昭和51年卒）

質疑応答の時間は、現役生に限って質問の権利が与えられ、多くの学生から手が挙がり、講師はその一つ一つに丁寧に答えていました。（質問内容は主にコミック作家の実際の人柄や噂の真偽について）

この授業で一番盛り上がったのは、最後に行った、講師のご持参による『非売品』のレアなグッズの数々を賞品にした、【大じゃんけん大会】でした。（文責　藤井由美子・S51卒）

受講者数が最多であると聞いていた通り、地学教室は現役生を中心に満席。茨木氏の現在のポストは集英社第三編集部部長。入社当時は、週刊少年ジャンプ編集部に配属され、作家の担当者を経て、週刊少年ジャンプ編集部の編集長及びジャンプスクエア編集部の編集長を歴任されて現在に至っているとのことです。

それだけに係わった作家の数は多数に及び、それぞれの個性や力量を見抜き、若手を発掘して世に送り出すことに講師の手腕が発揮されております。

また、多くの苦労話や裏話など多数の話題をお持ちで講話のなかでは、「ここだけの話」として、聴衆を楽しませてくれました。話の性格上ここにレポート出来ないのが非常に残念です。

3－4

「ぼくの津中・津高」

〈講師〉米本　宏先生（昭和4年卒）

津中・津高の卒業生にとっては数十年ぶりの恩師・米本先生の授業となり、幅広い年齢層の教え子達で広い教室は溢れかえり、予定した席が一杯で予備の椅子を並べての授業となりました。正確なるご記憶の下に手許資料なしに講義は進められ、ご両親の話にはじまり昭和四年津中を卒業、自由な気風溢れる旧制静岡高校、そして東大卒業後教師としての最初の赴任地・木本中学の話題に及び、兵役を経て昭和十五年に津中へ英語・国語の教師として赴任されて「ぼくの津中・津高」がいよいよ佳境に入りました。津中での最初の授業は英語で、ジャッジメントという英単語を大きな声で何度も繰り返したのが先生のあだ名「ジャジさん」のはじまり、以来今もなお、このあだ名は先生に対する親しみを込めて使われています。

戦後、津高で教鞭を執ることになりこの間の様々な出来事に話が及びました。七十一歳で先生は教壇を去り、退任後は、八〇歳から俳句に傾倒、句集「日向ぼこ」は既に五巻まで上梓されています。来年、先生は数え年百歳を迎えられますが、来年には第六巻を出される予定とのことで、今まで詠まれたいくつかの俳句を紹介されて先生の講義は終了しました。まさに白寿の教壇と呼ぶに相応しい講義でした。

（文責　加藤秀夫・S27卒）

3－5

「英語構文〝仕分け〟の意義と効用」

〈講師〉小田海平先生

卒業以来三十二年ぶりに小田先生の授業を受けさせていただきました。「三つ子の魂百まで」というわけではありませんが、やっぱり高校の時と同じくらい緊張しました。

小田先生は、退職されたもののまだ毎日四～五時間は翻訳の仕事を自宅でされておられるそうで、見た目は確かにお年はとられましたが（お互い様）、まだまだ現役の頃に劣らず頭脳明晰、「寄らば斬る」という感じで、お元気そのものでした。小田ファンの方々、ご安心を！

さて、授業は前半、幕末に英語がどのように日本に入ってきたか、そして英語がオランダ語に取って代わり、明治初期には新渡戸稲造や内村鑑三のように英語で書籍を執筆するだけでなくその内容も諸外国で高く評価されるまでになったことなどを例を挙げて詳しくご説明いただきました。後半は、5文型や文の種類（単文、重文、複文、混文）によって英文を分類し、「英語構文の見分けの意義と効用」を昔と同じ口調で熱っぽくお話いただきました。

私事ですが、今こうやって母校でしかも英語を教えられるのも小田先生にご指導いただいたおかげです。少しでも先生に追いつけるようにすることが先生への感謝の証だと改めて覚悟するいい機会にさせていただきました。

（文責　平賀美津雄・昭和53年卒）

4－1

全体講演会「自主自律を考える」

〈講師〉奥田　務（昭和33年卒）

会場である体育館には三百余名が集い正面にパワーポイントの画面、舞台側面のテーブル席から九十分のお話でした。

講演は日本の経済・福祉の面を中心に今日の少子高齢化、グローバル化に対応し、いま日本が採るべき道は競争の重要性とセーフティネットの再構築ではないかとの提言から始まりました。フィンランドの名誉総領事を務める奥田さん、北欧の経済にも触れ説得力ある内容で、さすが経済界のリーダーであると思いました。私たちの関心事である社会保障制度については、持続可能なものにするために支えられる人を支える側に、現金からサービス支給へなど日本の経済政策への警鐘も。講義の端々に感じられる奥田さんの誠実な人間性と深い経済哲学に感服しました。最後に日本に輝きを取り戻すためには津高の校訓である「自主自律」への国民自らの意識改革が必要であり、世界は日本に大きな期待をよせているとのエールを。百三十周年記念の正に時を得た講演であったと感謝いたします。

四時を少しまわり外は雨でしたが、みんなの笑顔が明るく光っていました。半世紀の時を経て母校で出会い、素晴らしい企画「母校の教壇」で今を共有できた喜び、胸が熱くなりました。ありがとうございました。

（文責　長谷川(鈴村)登代子・S33卒）

お茶席でおもてなし

小川初子（昭和47年卒）

表千家茶道部は和室でしっとりと落ち着いたお茶席を、裏千家茶道部は家庭経営室で立礼によるお茶席を準備し、先輩の皆様方をお迎えしました。何分、限られた空間で、特に昼休みには大勢お越しいただきましたので、行き届かない点が多々ありましたことを、お詫び申し上げます。

拙いお点前や道具の説明等にも皆様方が温かく接し熱心に耳を傾けてくださり、生徒達も、伝統ある津高の一員であることの素晴らしさに改めて気付いたようです。普段使っているお茶碗の一つ一つに先輩方の歴史があることを実感し、大切に後輩に引き継いでいきたいと思いを新たにしております。このような機会を頂き生徒、顧問共々感謝しております。（津高教諭）

経ケ峰登山

平成22年10月17日

委員長　保地勝彦（昭和38年卒）
若林英郎（昭和40年卒）

十月十七日に経ケ峰登山が行われた。一週間前の気象情報では雨のマークがあって心配していたが、当日は曇りのち晴れの絶好の登山日和になった。

幼稚園児から八十五歳まで、百七十名の幅広い年代の参加で、在校生はラグビー部・テニス部(女子)・剣道部の三十五名、最高齢は昭和18年卒業の島川甲子三さんと駒越喬貞さんで元気に山頂まで楽しまれた。

八時三十分に草生公民館を出発して、仲之郷の集落から比佐豆知神社を参拝してしばらく林道を歩き、全長五・八キロ標高差約七百メートルを二時間半から三時間でグループごと、楽しく和やかに登山された。

山頂では全員で「**津高130周年**」と書かれた縦十メートル、横二十メートルの特製シートを囲んだ。飯田同窓会長と榎本校長の挨拶のあと、十二時三十分に中日新聞社のヘリコプターからの記念撮影があった。

その後グループ毎に下山した。草生平尾地区の小林和彦さん（昭和39年卒）宅で餅つきがあって、あんこ・おろし・お浸し・きな粉餅をごちそうになった。また井村屋さん提供の肉まん、あんまん、あずきバーなど、山登りのあとの疲れた体に元気をいただいた。

この計画は一年半前に始まり、昭和38年卒、昭和40年卒の有志メンバーで打ち合わせ、下見登山も三回した。特に昭和40年卒の若林英郎さん（元津高校山岳部顧問）を中心に綿密な計画と準備がなされ、天候にも恵まれて無事に楽しく記念行事を終えることができた。（文責　保地勝彦）

「記念登山　見下ろす故郷　鰯雲」
「経ケ峰　頂は湧き　秋日和」　漁灯
（島川甲子三）

国内旅行

平成22年11月18日～19日

記念事業最終の国内旅行

岡　光洋（昭和32年卒）

十一月十八日、昭和26～45年卒の二十名で山陰へ。

伊勢の国を出る頃には、男性六名は後部のサロン席で、エーゲ海の旅、経ケ峰登山、そして恩師の思い出、高校時代の悪戯の数々を語る酒宴となる。

中国道に入ると、重なり連なる山々は、ナラなどのブナ科の木々黄葉の盛りである。

津山ICから院庄ICの間にバスガイドさんが「後醍醐天皇が北条氏を倒し、政権奪還を目指し笠置山で挙兵。しかし、幕軍に敗れ、隠岐の島へ流されることになった。一三三二（元弘二）年正月、六波羅から加古川をへて美作に着いたところ、児島高徳が警護の列を襲撃し後醍醐天皇を奪取しようと計り、一族で舟坂峠で待ち伏せるが、道筋を外され失敗。落胆した仲間は散っていったが、高徳は「院の庄」の行在所の庭に忍び込み桜の幹に『天莫空勾践（てんばくくうこうせん）、時非無范蠡（じひむはんれい）』（越王の勾践は呉の王に敗れたが、必ず范蠡のような忠臣が現れ助けてくれる）と彫った。

この故事を私も含め二十名は知らなかった。しかし、詩吟教室でこの話をしたら、八十歳の人は、文言も歌もさらさらと出てきた。

旧制中学卒と新制高校卒の歴史教育の差が歴然としたのに驚く。

やがて米子に着き、ゲゲゲの鬼太郎館に行く。各県の妖怪地図に三重県には、一つ目の藁草履の絵が印されていた。こんな話聞いたことがない。大王崎の祭(?)。本屋で水木しげるの妖怪辞典で帰津後立読みするが分からない。

夜、皆生温泉では、手品、合唱、詩吟等々と芸を披露。松葉蟹一杯ずつがデンとある。蟹づくしに満足。確か境港の市場で五千円位してたのでは…。

翌朝、足立美術館。外国の人々からも日本一の庭園と評されている。借景を採し、それに合わせて広大な庭や建物を配したという。計算尽くし、手入れされた美しさ。そして、自然のままの雪をかぶった大山の姿に魅せられながら、帰路に着く。

日本一土産物を買う三重県人、津高の同窓生というだけで打ち解けて楽しく旅を終えた。

記念グッズを作成して

藤岡美也子（昭和31年卒）
奥田榮子（昭和34年卒）

津高創立百三十周年、津高同窓会設立五十周年の記念の年に同窓会会員の一員として色々な記念行事に参加出来ますことを、とても幸せに思います。

この度の創立百三十周年には記念になる物を作ろうと記念グッズ係ができました。

陳川、三重桜、津高と高齢者から若者にまで喜ばれ男女をとわず記念に残る品をと、試行錯誤いたしました。同窓会事務局のご助言もいただき、クリアファイルと一筆箋に決定致しました。

陳川、三重桜、津高の校章や正門、美しい「津高の四季」がカラーで印刷されました。特に桜の正門（春）雪の正門（冬）は好評です。

校訓「自主自律」の表紙に、正門の写真が印刷され一筆箋も女性に喜ばれています。

二月末日に出来上がり三月一日の「卒業式」「ウォークラリー」「ゴルフ大会」「美術展」「母校の教壇」と出張販売を致しました。

学年会等で販売して下さることをお願い申し上げます。個人でもどんどん事務局にてご購入下さい。

（文責　藤岡美也子）

クリアファイル
「津高の四季」
五枚一組　五〇〇円

一筆箋
「自主自律」
三十枚一冊　二〇〇円
（記念事業グッズ係）

130周年記念事業協賛金へのご協力のお礼

副会長
（協賛金担当）
田川敏夫
（S32年卒）

百三十周年記念事業の十事業が盛会裡に終了しました。

これも事業費に対する会員の皆様のご協賛の賜物で厚くお礼を申し上げます。

十一月十二日現在で、陳川、三重桜、津高を合わせて千五百名余の方から、九百十一万円のご協賛を頂戴いたしました。

うち、三百万円は母校への記念寄付として、新築のトレーニング場への機器購入費の一部に当て六十万は記念講演の費用として当てました。

記念事業の実施に要する費用は概算で七百万円を見込んでおり、（最終決算は二十三年度総会でご報告します）学校寄附金を含めると一千六十万余となります。余剰金を、本部会計に繰り入れて、将来の同窓会活動の充実発展にあてたく今後のご協賛をさらによろしくお願いいたします。

なお、協賛金の募集期間は二十三年五月までとなっており、少しでも募集目標額の一千五百万円に近づくよう更なるご協力をよろしくお願いします。

同窓会本部会計収入は、入学時に終身会費として一万円いただくのみであり、近年生徒減となってきていることから通常事業費も逼迫しています。

百三十年を記念として、本部予算を充実させるよう重ねてご協力をよろしくお願いします。

物故者

謹んでご冥福をお祈りいたします。

（平成22年12月3日現在）
（敬称略）

旧職(14)	岩田直衛	
旧職	草野正	
旧職(17)	小林尚志	
旧職(28)	阿比子義孝	
陳S 7	油田穎一	
8	太田典雄	
9	岡田親孝	
10	中川義一	
14	川北(吉島)敬一	
14	山村宏	
16	棚橋祐作	
17	川本利久	
17	西岡久壽彌	
17	山室英夫	
18	岩崎正博	
20	古田悠	
22	井土熊野	
23	内山竹郎	
23	西條幹康	
23	中山幹造	
20入	由川恒	
三T 8	多羅尾和	
8	村上(岡田)みち子	
10	上田(杉田)芳子	
12	鈴木(渡辺)文子	
15	松井(坂野)美子	
16	鈴村(篠原)由紀	
19	落合(寺前)加寿子	
19	常磐井(中林)いと子	
20④	永原節子	
高S 24	松島弥三八	
25	秋山陽一	
25	駒田忠重	
26	伊藤益雄	
26	内山凞	
26	田中滋	
26	辻稔	
26	中村淳三	
26	渡辺(渡辺)マキ子	
27	国府正男	
27	増井昭治	
29	小菅茂	
29	山田謙夫	
30	石川(中村)素子	
31	門野(三藤)節子	
32	川本正博	
37	宮崎芳洋	
38	上久保(片岡)貴美子	
38	佐藤清	
39	上田道夫	

各地で同窓会開催

東京同窓会

昨年、新型インフルエンザの流行で急きょ中止になり、二年振りとなる津高東京同窓会は、五月二十九日(土)、霞ヶ関ビル三十五階の東海大学校友会館にて、百四十四名の出席のもと開催されました。

東京同窓会の谷口武会長（昭和30年卒）の「創立百三十周年、津高同窓会設立五十周年、そして東京同窓会が復活して二十年目と節目の重なる会合が開催できたことをみんなで喜び、さらに発展させていきましょう」とのご挨拶で開会しました。

今年の総会では、初企画の「津高検定二級」と題したクイズ大会を行い、先輩・後輩入り混じる十四チームで競い、津高の歴史、校歌、思い出アルバム、ふるさと津の街に因んだ問題の数々で、大いに盛り上がり、時の経つのを忘れる三時間でした。

最後に陳川、三重桜、津高の校歌を参加者全員で歌いあげ、再会を約して、本年度の総会はお開きとなりました。

（輪番幹事38年卒一同）

名古屋同窓会

本年度名古屋同窓会は九月十八日(土)、名古屋東急ホテルにて開催されました。同窓会本部より古市恒夫副会長、橋本喜久男副会長、津高より榎本和能学校長をお迎えして百三十六名の先輩後輩がにぎやかに集いました。

総会に先立って、藤田保健衛生大学医学部外科・緩和医療学教授の東口高志先生（昭和50年卒）より緩和医療についての講義がありました。とても解りやすく楽しくお話いただきました。人生を生き生きと過ごしていくが大事であると気持ちを新たにしました。今回は、津高創立百三十周年同窓会設立五十周年にあたり、津高の校門写真入りクリアファイルもいただきました。

その後総会、懇親会が行われ、恒例の津高クイズでテーブルごとに順位を競い合いました。楽しく、にぎやかに過ごし、最後に全員で若き津高生に戻り校歌を合唱しました。来年もまた集まりたいという気持ちで再会を誓い、閉会となりました。

山本　直紀（昭和54年卒）

大阪同窓会

第四十四回津高大阪同窓会は十一月三日(水)午前十一時から天王寺都ホテルにて行われ、同窓会本部から飯田俊司会長、葉山俊郎副会長、津高より榎本和能学校長、恩師の澤口友彌先生、竹森淳二教頭先生をお迎えし、会員百六十名が出席し盛会に行われました。

総会では、奥田務津高大阪同窓会会長、各ご来賓のご挨拶の後、社会福祉法人実践の理事長久米宏毅氏（昭和39年卒）による「介護、その上手な利用方法」という演題で講演が行われました。その後、岡村初博元会長のご発声により乾杯の音頭が取られました。会食、懇談のあと、桂三四郎さんの落語、福引きで盛り上った後、「校歌」「ふるさと」を斉唱し、来年の再会を約して閉会となりました。今年の企画は、昭和39年卒が担当しました。

山内成樹（昭和39年卒）

進路状況

（大学合格者数）

	国立	公立	私立	短大
(2010) H22年	221	39	764	6
(2009) H21年	210	34	557	11
(2008) H20年	199	40	721	12
(2007) H19年	233	47	836	6

	北海道	東北	筑波	お茶の水	東京	一橋	東工大	東京外大	横国大
(2010) H22年	8	2	1	0	4	2	2	2	3
(2009) H21年	16	7	1	0	5	2	0	1	1
(2008) H20年	4	1	1	0	6	3	1	3	2
(2007) H19年	6	3	1	0	3	4	1	1	6

静岡	金沢	信州	名古屋	名工大	名古屋市立	三重	県立看護	京都	大阪	大阪府立	大阪市立	神戸	奈良女	広島	九州	慶応	早稲田	上智	青山学院	中央	東京理科	日本	明治	法政	立教	南山	名城	皇學館	龍谷	京都産業	同志社	近畿	立命館	関西	関西学院
2	12	5	16	4	1	51	3	15	32	5	4	12	3	4	0	19	20	4	5	22	22	3	31	9	5	50	32	24	10	3	98	27	111	47	27
5	10	6	19	3	5	55	2	9	29	8	1	6	1	6	2	16	20	5	6	18	20	2	15	7	4	39	26	20	6	4	47	18	59	29	24
2	8	5	21	14	5	55	0	11	25	10	7	6	1	2	0	11	27	3	0	10	28	11	15	5	3	42	50	26	12	11	62	34	93	47	32
6	8	7	31	2	9	64	5	12	17	10	4	10	1	6	0	17	26	5	8	20	40	4	21	6	4	46	59	28	10	10	67	31	91	51	34

お知らせ

平成二十三年度　**同窓パーティー**

日　時　平成二十三年八月六日（土）
午後三時より

場　所　津都ホテル
津センターパレスホール五階

テーマ　「いってみよう　きてみよう
あのころに」

担当学年幹事　昭和53年卒（代表　井ノ口　貢）
平成2年卒（代表　吉岡　正人）

平成二十二年度の総会・パーティーを終えて

運営委員会副委員長　宇陀　和彦（平成元年卒）

去る八月七日（土）、「耀け！永遠に～もっと☆ずっと☆きっと～」をテーマに、津都ホテルと津センターパレスホールを会場として、平成二十二年度陳川・三重桜・津高同窓会総会・パーティーが行われ、会員皆様七六〇名余のご参加を頂きました。

総会は、物故会員への黙祷に始まり、西城実行委員長による開会の辞、飯田同窓会長のご挨拶、榎本学校長のご挨拶、来賓の方々のご紹介へと続きました。同窓会本部からは昨年度事業・決算報告、本年度事業計画・予算と同窓会役員案が提出され、いずれも承認されました。そして最後に、百三十周年記念事業に関するPRが、瀬古副会長によって行われました。

パーティーは、竹林副会長による乾杯のご発声で幕を開け、「パンダ岡崎トリオ」のジャズ演奏が流れるなかでのご歓談となりました。終盤は次年度幹事学年紹介の後、百三十周年を記念したビデオ「津高校の過去と現在」を上映し、恒例の校歌斉唱で幕を閉じました。

今回の総会・パーティーを通じて津高校の歴史と層の厚さを実感することしきりの幹事学年でありました。不慣れな点、幹事として至らぬ点も多々あったかと思いますが、同窓生皆様のご協力を頂くことで、無事に終えることができました。ここにご報告申し上げますと共に、皆様にお礼申し上げます。

平成二十三年度同窓会

実行委員長　井ノ口　貢（平成53年卒）

今年度、津高校創立百三十周年と陳川・三重桜・津高同窓会が統合して五十周年を迎えました。

そして来年度は更なる伝統を築くための新たな一年を踏み出すことになります。

引き継ぎ会で諸先輩方から若い世代の同窓会への出席率の悪さをご指摘いただき、来年度は同窓会の素晴らしさをアピールしつつ、どこまでできるかわかりませんが「よし参加してみよう」という気持ちを起こさせるような会にしたいと思います。

「いってみよう　きてみよう　あのころに」というテーマのもと平成卒の若い担当学年と協力して意義ある楽しい同窓会にするつもりで頑張りますので、皆様ぜひご参加の程よろしくお願いいたします。

百三十周年記念名簿発売中

創立百三十周年を記念して同窓会名簿を平成二十二年一月に発刊しました。会員数約三万数千人を数える名簿は同窓会員であることが条件で好評にて発売いたしております。ご希望の方は事務局までお申し込み下さい。

一冊　五千円
（送料込）

事務局だより

○会報四十八号を二万五千三百部発行しました。今回は創立百三十周年記念特集号として、十一月に行われた国内旅行の記事まで掲載した関係上発行を例年より約一ヶ月遅らせ十二月二十八日といたしました。年末の郵便事情の関係もあり一月五日発送といたしましたのでご了承ください。

○住所異動の際は、卒年・名前・新住所をお書きの上、事務局までお知らせ下さい。葉書・FAX・メールにて受け付けております。

○事務局　月・火・水・金曜日の午前九時十五分から午後四時十五分まで開いています。

参加者募集

★第三回　学年対抗ゴルフ大会

学年対抗ゴルフ大会を開催します。ふるってご参加ください。

日　程　平成二十三年三月二十七日（日）

場　所　三鈴カントリー倶楽部
（鈴鹿市小社町七六七）

参加費　一五、〇〇〇円
（プレー費・キャディー付・昼食・パーティー代・会費含む）

定員　百六十名（定員になり次第〆切）

※厳守　各学年三名以上十六名以内

※練習ラウンドの設定あり

※お問い合わせ・お申し込み先
津高同窓会事務局
TEL　059-229-7331

津高同窓会のホームページ
http://tsuko.jp/
メールアドレス
office@tsuko.jp
TEL・FAX 059-229-7331